

## 菅原道真における「不出門」の詩の解釋をめぐって

著者	菅野 禮行
著者別名	SUGANO Hiroyuki
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	50
ページ	117-127
発行年	1992-06-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150113">http://doi.org/10.15068/00150113</a>

# 菅原道眞における「不出門」の

## 詩の解釋をめぐって

### 菅野禮行

好逐<sub>ニ</sub>孤雲去<sub>ニ</sub>」について、特に「好」の字義に注意しながら、改めてこの句の意味を再考してみたい。

#### 二

菅原道眞（八四五—九〇三）の太宰府謫居中における「不出門」の詩は、次に掲げられるように謹慎蟄居の眞情を吐露した代表的な作品として、人口に膾炙されている。（テキストは、日本古典文學大系本）  
『菅家後集』による。

一 從<sub>ニ</sub>滴落<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>柴荆<sub>一</sub> 万<sub>コ</sub>死<sub>ニ</sub>兢兢<sub>ニ</sub>踟躕<sub>ニ</sub>踏<sub>ニ</sub>情<sub>一</sub>  
都府樓<sub>ニ</sub>纔看<sub>ニ</sub>瓦色<sub>一</sub> 觀<sub>ニ</sub>音寺<sub>ニ</sub>只聽<sub>ニ</sub>鐘聲<sub>一</sub>  
中懷好逐<sub>ニ</sub>孤雲去<sub>一</sub> 外物相<sub>ニ</sub>逢<sub>ニ</sub>滿月迎<sub>一</sub>  
此地雖<sub>ニ</sub>身無<sub>ニ</sub>檢繫<sub>一</sub> 何爲<sub>ニ</sub>寸步<sub>ニ</sub>出<sub>レ</sub>門行<sub>一</sub>

この詩の頸聯「中懷好逐<sub>ニ</sub>孤雲去<sub>一</sub>、外物相<sub>ニ</sub>逢<sub>ニ</sub>滿月迎<sub>一</sub>」は、とりわけ下句を中心として従來諸説が行われている。そのことについては、かつてその概略を整理し、かつ私見を試みたことがあつたが、いま本稿では、その上句「中懷

はじめに、「中懷好逐<sub>ニ</sub>孤雲去<sub>一</sub>」の句について従來どのような訓みと解釋がなされてきたか、見なおしておきたい。

まず挙げなければならないのは、日本古典文學大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店刊）に示された川口久雄博士の説であろう。同博士はこの句を、「中懷は好<sub>ニ</sub>し<sub>一</sub>孤雲に逐<sub>レ</sub>て去る」と訓み、「精神の内部はちぎれ雲とともにみんな去つてしまつて、空虚である。ままよそれでいい」と解釋する。

これに對して、猪口篤志博士は、新釋漢文大系『日本漢

詩(上)』(明治書院刊)において、この句を、「中懐好し孤雲を逐うて去るに」と訓み、「胸中は常に空飛ぶ孤雲を逐うて去るが如く、浮世の事は一切忘却し」と解釋し、語釋の項で次のような註釋を加えている。

中懐 胸中に懐抱するもの

好し いざ。ままよ。「どうなるうとも、それでよし」

という程の意。

逐孤雲去 ちぎれ雲のあてもなく流れてゆくのを追いかけてゆく。「一身がもはや孤雲の如く寄るべもないが、ままよどうなるうとも」と、あきらめの心境。焦燥感なく心の落ち着いている状態。陶淵明の「詠貧士」詩の「万族各有託。孤雲独無依」にもとづいたか、李白の「独坐敬亭山」の詩にも、「衆鳥高飛尽。孤雲独去闲」の句がある。陶淵明の帰去來辭にもとづく杜甫の「西閣」の詩の「百鳥各相命。孤雲無自心」の句も、意境相似たものである。論語の富貴浮雲のたとえ(述而篇)も発想の根底にあるかも知れない。

猪口博士は前掲著書の餘説の項で、「不出門」における頸聯、「中懐…外物…」の解釋について、川口説にまささかの疑義をさしはさむもの(3)の、この聯の上句、「中懐好逐

孤雲去」に關しては、訓讀・解釋ともに大筋において川口説と違はない。特に、「中懐は好し孤雲を逐ひて去る」という訓み方は、現存最高の善本といわれる尊經閣文庫藏寫本『菅家後集』や、彰考館藏寫本、また諸版本などいずれも同様に訓む。

ところが、小島憲之博士は、『王朝漢詩選』(岩波文庫)において、「中懐…」の句について、「刊本『中懐好逐雲去』(中懐好し孤雲ヲ逐テ去ル)と訓み、理解しやすいが、次の対句を考慮して、訓讀を改めてみた」として、「中懐好く逐ひ 孤雲去り」と訓み、「心の中はひとひらのちぎれ雲が去ってしまったようにそれを追って何のわだかまりも残らぬほどのよい状態であり、……」と解釋する。

小島博士が、「次の対句を考慮して云云」といわれるのは、「中懐…外物…」の下句「外物相逢滿月迎」を、「外物相逢ひ滿月迎ふ」と訓んだのに合わせて、従来傳統的に「中懐は好し孤雲を逐ひて去る」と訓まれていた訓み方を、右のように改めてみたというのである。いずれにしても、この句の意味を右のように解釋することについては、川口・猪口説と同じ立場をとるものである。すなわち、道眞の心境を平靜空虚な達觀の境地にあるとする點では共通している。しかし、「不出門」は左遷當初の作品であり、それ

からほどなく作られた「秋夜九月十五日」と題する七律、

黃萎顔色白霜頭 况復千餘里外投

昔被榮花簪組縛 今爲貶謫草萊囚

月光似鏡無明罪 風氣如刀不破愁

隨見隨聞皆慘慄 此秋獨作我身秋

をはじめとして、後集全編が悶悶たる孤獨憂愁の情におおわれ、絶筆となった七絶「謫居春雪」では、

盈城溢郭幾梅花 猶是風光早歲華

雁足黏將疑繫帛 烏題點著思歸家

とうたい、蘇武と燕丹との故事をふまえて望郷の念もだしがたきを訴える。このような終始悶悶たる道眞の心情を考えると、左遷當初の「不出門」の詩においてのみ、平靜空虚な心境であったと解釋するのは、いささか矛盾していて道眞の心情を正しく理解してはいないのではないかと思われる。

ひるがえって考えるに、そもそも「不出門」という詩題は白居易の文學にみられる特徴的な詩題であった。その上、その領聯「都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲」が、白居易の「遺愛寺鐘欵枕聽、香爐峯雪撥簾看」（香爐峯下、新卜山居、艸堂初成、偶題東壁、重題）によったものであることは周知のことであったし、道眞の「中懷：外

物：」という對比的表現も、實は白居易の詩にみられる特質を模したものであった。それらについては、すでに拙著において詳細に論じたので改めて繰返さない。しかし今ここでは、本稿論述の都合上、白詩語としての「中懷」の意味を要點的かつ結論的に整理するために、「中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎」における道眞の心境を、私がかつてどのようにまとめておいたか次に引用しておきたい。

そもそもこの聯は難解で、解釋上の問題點を含むものであった。それというのも、「中懷」と「外物」という對比的に用いられている語の意味が明確にされなかつたためである。これらの語を詩の中で對比的に使用する例は、白居易の作品に特徴的に見られることであつた。少なくとも盛唐・中唐の代表的詩人との比較においては少うである。

そこで、白居易における「中懷」の語の用例を調べてみると、「外物」の語と對比的に用いられるとき、脱俗閑適の心境を意味するものであつた。そうした心境は、白居易が常に理想としていたものであつたのである。また「外物」ということばは、『莊子』に典故のある語で、白居易にとって世俗的な名利榮達などを意味するものとして否定さるべきものであつた。そして、靜謐な閑適の

心境を理想として追求するあまり、ともすれば世俗的なものに累わされやすい自分自身すら、白氏には「外物」と認識される。それは、白居易の「遣懷」と題する詩の中に「此身是外物」（此の身は是れ外物）と歌っていることから明確にうかがわれるところである。

かくして白詩語としての「中懷」「外物」の對比的表現の影響下において、道眞の「不出門」の頸聯、「中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎」（中懷は好し孤雲の去るを逐ひ、外物は滿月の迎へに相逢はん）を見ると、從來行われてきた解釋には疑問を感じざるを得ない。すなわち、大儒菅原道眞の悟りに近い澄んだ圓滿な心境を敍したものとしてこの一聯を解釋する從來の説は、白詩語の用法に照らして納得し難いものがある。前述した通り、道眞はこれらの白詩語を十分に承知していたはずである。しからば、道眞の「不出門」における頸聯は、單に白居易の詩的對比語としての「中懷」「外物」を表面的に擷取したというよりは、それらの語に託せられた白居易の心情が、道眞の詩的心情の深層部分に深くかかわっていると見るべきである。従って、道眞の「不出門」の詩の中でもとりわけ難解とされていた頸聯「中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎」（中懷は好し孤雲の去るを逐

ひ、外物は滿月の迎へに相逢はん）の意味は、およそ次のようになるであろうか。すなわち、「(太宰府に左遷され悶悶たる蟄居の生活を餘儀なくさせられている私の現在の心境は、)白居易が理想としていた自足の境地とは程遠く、何物にもわずらわされない悠々自適の白氏のごとき思ひは、一片の雲を追うようにして私の胸中から去ってしまった。かくして心ならずも世俗の波に翻弄されて憂き目に遭う私は、月光に無實を晴らしてほしいと望みつつ、何時かその滿月に迎えられるようにして、都に歸る日にめぐり逢いたいものである。」というのである。つまりこの聯は白詩語を巧みに用いながらも、白居易とは程遠いむしろ逆な心境を歌うのである。(注1)に掲げた拙著、一七五―一七六ページ)

白詩語を驅使しながらも、むしろ白氏とは相異なる心情表現を意圖していたという點は、この例以外にも拙著においてしばしば詳論したように、道眞の文學の特質の一端を示す事柄であり、道眞文學の本質を解明する上では重要な手がかりとなるものであった。

### 三

さて、「不出門」の頸聯の訓みと意味を、前節で試みた

ごとく一應まとめてはみたものの、いまひとつ落ち着かないのは、「好」の字の解釋である。この部分については、私も明確な解釋が得られないままに、先學の諸説のごとく、一應は「ままよ、それならそれでよい」と解釋する説に従ってきた（前掲、拙著一六一ページ）。それは、一種の諦觀の心境を「好」の一字に示したものとの方である。

私はこの聯全體が示す心境を、これまでの通説のごとく、苦しい思いは空の彼方に去り現在に空虛圓滿な平靜な心境だとは解釋せず、白氏のごとき自足閑適の思いは雲とともに消え現在は苦しい境涯にあると解釋したのであった。この解釋は、基本的には通説とは逆の立場には立つものの、「好」の字の解釋については、「ままよ、それならばそれでよい」と解釋し、一種の諦觀の心境をも含むものとする點で諸説に近いであろう。しかし、前述したように、いかなる意味の諦觀にせよ、そう簡單にその境地に達し得たものであったらうかという疑問は、やはり残る。そこで冒頭にも述べたごとく、「好」の字義に即して更に考えをめぐらせてみたい。

「好」の字義を、「ままよ、それならそれでよい」と解釋する根據は、「中懷好逐孤雲去」における「好」と「去」の字の響き合いによるものである。「好去」は、張相の

『詩詞曲語辭匯釋』によれば、「居者安慰行者之辭」（居る者、行く者を安慰するの辭なり）と説明して、

好去張公子、通家別恨添。

（杜甫、送張十二參軍赴蜀州）

春盡絮飛留不得、隨風好去落誰家。

（劉禹錫、柳枝詞）

南浦萋萋別、西風嫋嫋秋。

一看一腸斷、好去莫回頭。

（白居易、南浦別）

好去鴛鴦侶、沖天便不遷。

（白居易、待漏入閣書事）

などの詩句を掲げる。これらの「好去」は、いずれも「さようなら。ご無事で。ごきげんよう」などの意味で、「別れて行くのもそれならそれで（引きとめようもないのだから）いたしかたない、ままよ」の意も含むものである。

『菅家文草』や『菅家後集』にも、「好去」の例は散見される。いま、文草中における詩句の一例を、川口注とともに次に掲げてみよう。訓みは大系本（三五四ページ）に従う。

流年好去從官老  
流年好し去れ 官に從ひて老いむ  
官滿歸時自遇春  
官満ちて歸らむ時 自らに春に遇

## 〈川口注〉

水のように流れる歲月よ。御機嫌よう！ ままよ、行くなら時間よ過ぎ行け、我らはともに官界のまにまに任に従って老いて行けばよろしい。「好去」も、去りゆくものを安慰する俗語。

官秩満ちて、帰京する時は、自然めぐりくる春に遇うこともあろう。(いつまでも寒い冬ばかりではないはず、君よ安んぜよ。)

この詩句は、作者が四十五歳、讃岐守として任地にあつての七絶、「訓<sub>三</sub>藤六司馬幽閑之作<sub>一</sub>、次<sub>三</sub>本韻<sub>二</sub>」の轉・結句である。道眞にとって讃岐への赴任は事實上の左遷であつたから、讃岐掾藤原某が「幽閑之作」を寄せて來たのに對して、同病相憐む思いをもつて酬いたものであつた。それだけにこの詩句は、その十二年後に流謫の地太宰府でうたった「不出門」の頸聯、「中懷好逐<sub>三</sub>孤雲去<sub>一</sub>、外物相逢<sub>三</sub>滿月迎<sub>二</sub>」と、その心情表現の上で共通するものがある。すなわち、それぞれの上句は、讃岐では時は流れ老いゆくのみとうたったのに對して、太宰府では心中閑適の懷いは白雲と共に流れ去つて苦境にあるという。また下句については、それぞれに、讃岐では任期が満ちて歸京し春恩にめぐ

り逢うのが早からんことを祈るのに對して、太宰府では滿月の明るさによって我が身の無實を晴らし早く京に迎えられたいと熱望している。

このように、文草中に見られる「好去」の他の詩句例に照らしてみると、「中懷好逐孤雲去」の句は、「中懷よ(平穩閑適を求める思いよ)、好し去れ、さらば止むを得ぬ…」と理解するのも、わからないわけではない。その意味では、この句が古寫本や版本をはじめ、傳統的に「中懷は好し孤雲を逐ひて去る」と訓みならわされて來たのも、一理あることである。つまり、「中懷」「好去」が主述關係、「逐孤雲」が「去」の修飾語という理解に基づく訓み方である。

しかし問題は、果たしてこの句を、「中懷」が「好去である」というように、或は「中懷よ」、「(お前は)「好去なれ」というように、主述關係としてとらえてよいであろうか。なぜなら、この句のリズムは、「中懷・好逐・孤雲去」(中懷は、好く逐ふ、孤雲の去るを)と理解するのが素直な訓み方ではないかと思ふからである。そのように訓めば、この句と對をなす下句「外物相逢滿月迎」(外物へ我が身<sup>(6)</sup>)は、相逢はん、滿月の迎へに)のリズムともうまく合うことになる。その意味で、前述の小島博士の訓みには

贊意を表したい。

#### 四

さて、上述のように考えてくると、「好」の字を「まよ、それならそれでよい」と解釋するのは、いささかぎこちなくなってくる。やはり「好」の字は、「逐」の修飾語として解釋するのが穩當であろう。「孤雲の去りゆくのを」逐うのは、どのように「逐う」のかというと、それは「好」の状態で逐うのだという文脈でとらえたい。つまり、この句を端的に構造的にとらえれば、「中懷は、孤雲の去るのを、好く逐っている」のである。

それでは、「好」とは一體何か。川口博士がこの字を「こ」とむなし」と訓むのは、恐らく『類聚名義抄』の古訓によるものであろう。觀智院本『類聚名義抄』（風間書房影印刊本）によれば、「ヨシ」「カホヨシ」など九種の訓を掲げる中に、「コトムナシ」の訓を挙げ、それに朱で斜線を掛けた形の合點が付してある。中田祝夫博士の解説によれば、この合點は『類聚名義抄』成立當時のもので、師説があり確かな據り所に基づくという訓について、特に施した符號だといわれている。

「コトム（ン）ナシ」は、「事も無し」の轉で、字書的な

意味は「何事も無い。無事である」の謂である。この古訓については、後に詳述するが、これは菅家相承の訓であらうと推定される。しかし今日、『菅家文章』や『菅家後集』について、明らかに菅家點をとどめていると見られるものがないようなので、いましばらく他の文献によって考察を進めたい。

鎌倉時代の付訓古寫本であることがはっきりしている『和漢朗詠集』の諸寫本の中、菅家點を傳えているのは、

尊經閣文庫藏嘉禎四年（一一三八）寫卷子本（以下、

尊經閣文庫本と略稱）

蜂須賀家舊藏專修大學藏菅家相傳本（上帖は建長三年

（一一五一）寫。下帖は正元元年（一一五九）寫）

（以下、專修大本と略稱）

京都府立総合資料館藏卷子本（以下、京都府立本と略稱）

大東急記念文庫藏嘉曆元年（一一三六）寫卷子本

などが知られている。いまこれらの中、影印本（專修大本）や複寫本など手許に資料がある前の三本を主とし、その他の古寫本なども参看しながら、「好」の字の菅家相承の古訓を調べてみたい。



五

『和漢朗詠集』初冬の部立の中に、白居易の詩句「十月江南天氣好、云云」がある。この句中の「好」の字に注意して諸本の訓みを検討してみると、尊經閣文庫本・専修大本ともに、

十月江南 天氣好コトナンナシ

と訓む。さらに、京都府立本では、

十月江南 天氣好コトナンナシ

と訓んでいて、「好」の字を菅家點では、「コトム(シ)ナシ」と訓んでいることが明らかである。なお、宮内廳書陵部藏傳爲家筆寫本では、

十月江南 天氣好コトナンナシ

と訓み、「好」の字の左に「コトナンナシ」と傍訓する。某家藏日本古典文學會影印卷子本でも、

十月江南 天氣好コトナンナシ

と訓み、「好」の字の左に「ナリ」と傍訓する。この寫本は、築島裕博士の解題に據れば、「藤原南家の點本の古いものの一つとして、重要な資料」といわれるものである。この「ナリ」の傍訓の意味するところは、「コトナンナリ」とも訓むの意であろう。

いずれにしても「天氣好」の「好」の字の訓み方は、鎌倉時代の付訓寫本などでは「コトム(シ)ナシ」という訓み方が主であったことが知られる。

なお、山田孝雄博士の岩波文庫本『倭漢朗詠集』では、

十月江南 天氣好コトナンナシ

と訓む。

次に、さらに別の詩句中にある「好」の字に眼を轉じてみたい。

朗詠集「暮春」の部立中に、源順の詩句「劉白若知今日好、云云」がある。これを尊經閣文庫本では、

劉白若知リウハクニシ 今日好コトナンナシ

と訓む。これを専修大本では、

劉白若知リウハクニシ 今日好コトナンナシ

と訓み(括弧内のバ・ヲは筆者が補ったもの)、尊經閣文庫本の、「コトナンナキコトヲ」の「コト」があるかないかの違いだけである。なお、日本古典文學會影印卷子本は、

劉白若知リウハクニシ 今日好コトナンナシ

と訓み、「コトナンナキコトヲ」の「キ」の左下に、同じ墨書で「ル」の字を傍書する。このことは、「コトナンナルコトヲ」とも訓むことができるという意味であろうか。國會圖書館藏狩谷棧齋舊藏本には、「コトナンナルコト」と訓ん

でいる。また、靜嘉堂文庫藏傳後宇多天皇宸翰本も、

劉白若知リウハクニシヤクニシカハ 今日好コノヒヨクニシカハ

と訓む。さらに、宮内廳書陵部藏傳爲家筆寫本は、

劉白若知リウハクニシヤクニシカハ 今日好コノヒヨクニシカハ

と訓んでいる。菅家點を傳える京都府立本が、

劉白若知リウハクニシヤクニシカハ 今日好コノヒヨクニシカハ

と訓むのも、「好」の字を「ことんナキコトヲ」と訓ませたものと考えられよう。

なお、山田孝雄博士は、前掲の岩波文庫本『倭漢朗詠集』で、この句を次のように訓んでおられる。

劉白若知リウハクニシヤクニシカハ 今日好コノヒヨクニシカハ

## 六

さて、上述の古寫本が、菅家點を中心としておしなべて上例の「好」の字を、「事も無し」の意味で訓じていることがわかるであろう。

このように、「天氣好」「今日好」の「好」を「ことむ(ん)なし」と理解する以上、これらの語句は單純に「天氣が良い」「今日は良い日だ」などというそれだけの意味ではなさそうである。

そもそも、右の「天氣好」という語句は、『白氏文集』

卷二十(那波本)に所収する七律、「早冬」の詩の第一句中の表現であった。次に、その全詩を掲げてみよう。

十月江南天氣好 可憐多景似春華  
霜輕未殺萋萋草 日暖初乾漠漠沙  
老柘葉黃如嫩樹 寒櫻枝白是狂花  
此時却羨閑人醉 五馬無由入酒家

この詩は、白氏五十二歳、杭州刺史に除せられて二年目の初冬の作品である。冬とはいえ溫暖な江南の好景に満足し、酒屋で一杯といきたいが刺史という立場上それも簡単にはできないとうたう。この日、たしかに陽ざしの暖かな小春日和ではあったろうが、この「天氣好」という表現には、上田敏のブラウニングの名譯で知られる「すべて世は事も無し」(『海潮音』春の朝)に近い情調が汲みとれる。

白氏はこの翌年、錢塘湖堤を修築している。美しい江南で仕事も順調に進み、何のさしさわりもない平穩な心境、そしてそれを支えてくれているのが、今日のこの「天氣好」なのだ、有難くも幸せな限りだ、などという意味あいを含めての「天氣好し」という表現であった。

次に、朗詠集に収録しない文集中の白詩語「好」の場合も、一應検討しておきたい。

『白氏文集』卷十四(那波本)に、「八月十五夜、聞雀

大員外翰林獨直、對酒翫月。因懷禁中清景、偶題詩」と題する次の七絶がある。

秋月高懸空碧外 仙郎靜翫禁闌間

歲中唯有今宵好 海內無如此地閑

この第三句は、「歳中唯だ今宵の好きこと有るのみ」と訓み、その「今宵好」の部分の意味を説明的に解釋すれば、「今晚は何のさしきわりもなく平穩無事に名月を賞することができる良夜だ。禁中で月を翫ぶことができる境遇といい、折りしも八月十五夜の名月を仰ぐ清景といい、すべて良くしたものだ」ということになるであろう。そのように訓むことで、第四句の「海内此の地の閑なるに如くは無し」の意味するところとうまく合致することになる。「今宵好」を、「今夜はお天氣に恵まれた良い晩だ」と單純に解釋するだけでは、白氏の眞意に迫り得ない。「ことむ(ん)なし」と訓む場合の「好」には、そのような重く深い意味があるのである。續國譯漢文大成の『白樂天詩集』では、この「今宵好」の「好」も、前述の「十月江南天氣好」の「好」も、ともに「よし」と訓んでいる。しかし、岩波日本古典文學大系や新潮日本古典集成の『和漢朗詠集』に所収する白詩句「十月江南天氣好」では、「好」の字を「ことむなし」と訓むものの、「何とも好もしい」(岩波)とか、

「(天氣がよくて)好もしく…」(新潮)などと解釋するのはやや物足りない。

## 七

さて、これまで考察してきた「好」(ことんなし)の意味をもって、道眞の「不出門」の詩における「中懷好逐孤雲去」の場合を考えれば、どのようになるであろうか。以下、「好」が「事も無し」の意で用いられた場合、述語のみならず修飾語「ことんなく」としても機能し得ることを前提として考えることとする。

少なくとも、この句の訓みについては前述したごとく、「中懷は好く孤雲の去るを逐ふ」と訓みたい。問題はその解釋である。この句のリズムを、下句の「外物相逢滿月迎」(外物は、相逢はん、滿月の迎へに)に合わせて、「中懷は、好く逐ふ、孤雲の去るを」と考えたいことはすでに述べた。その「中懷」の語も、實は白詩語に基づくもので、白氏のごとき閑適自足の心中の懷いを意味するものであった。道眞はこの句で、そうした、白氏ならば懷くであろう閑適の思いは、道眞の傷心を置きざりにして孤雲と共に去ってゆく、急轉した道眞の運命的な悲哀とは、「中懷」は無縁なのだといわんばかりに、何事もなかったように速ぎ

かるといのである。つまり、道眞は、白氏が左遷の憂き目に遭いながらも自適した心境には到り得ないでいる。たとえ急轉直下の流謫の地にあっても、白氏のように閑適に心を遊ばせることができれば救われるのに、道眞にはそれができない。憂愁を救ってくれるはずの自適への思いが、非情にも何事もなかったように、無心に孤雲とともに去ってゆく。そのようにうたわざるを得なかった道眞は、流謫の地にあつて、どうすることもできない現實の自己を見すえ、觀照の世界の中に我が身を置いてゐる。すなわち、白氏の達觀の境は觀念的には理解できても、いざ自分がその逆境に翻弄されてみると、そうした達悟の思いは、自分を一顧だにせず離れてゆくのであつた。道眞は、そういう自己をここで見つめてゐる。川口久雄博士は、道眞の「詩情怨」「紋意」百韻などの長編の作品を、述懐自照の文學として道眞の詩の世界における特徴の一つに擧げられた。これまで論じてきたことを考えあわせると、この「不出門」の詩も、律詩という短詩型ながら、彼の自照の文學の代表的な作品の一つとして位置づけてもよいのではないかと思われる。道眞の「不出門」の詩における、「好」の一字の意味するところは深く大きいものがある。

注

- (1) 拙著『平安初期における日本漢詩の比較文學的研究』(昭和六十三年十月一日、大修館書店刊)一四六～一四七ページ。
- (2) 川口久雄校注『菅家文草・菅家後集』(日本古典文學大系。昭和四十一年十月五日、岩波書店刊)四八一ページ。
- (3) 猪口篤志著『日本漢詩(上)』(新釋漢文大系。昭和四十七年八月二十五日刊)七四ページ。
- (4) 川口久雄校注『菅家文草・菅家後集』解説、六四四ページ。
- (5) 小島憲之編『王朝漢詩選』(岩波文庫。昭和六十二年七月十六日、岩波書店刊)三四七ページ。
- (6) 「外物」を「我をめぐる外側の世界」(川口説)と解釋する考え方もあるが、白詩の「中懷・外物」の對比的用例における意味に照らして、「我が身」と解釋するのが妥當である。詳しくは、注1の拙著、一五一～一五四ページ参照。
- (7) 『日本古典文學大辭典』第六卷(一九八五年二月二十日、岩波書店刊)『和漢朗詠集』の項、三四五ページ。
- (8) 柿村重松著『和漢朗詠集考證』(大正十五年刊)昭和四十八年十二月十五日、藝林舎再刊)においては、「十月江南天氣好」と訓む。三〇七ページ。
- (9) 拙稿「漢字の古訓」(國語教室)第四五號(平成四年二月二十五日刊)所收)参照。
- (10) 川口久雄校注『菅家文草・菅家後集』解説、四七七ページ。

(静岡大學)